



Title	近江における緑釉陶器生産の再検討
Author(s)	高橋, 照彦
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2020, 54, p. 1-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91371
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近江における緑釉陶器生産の再検討

高橋 照彦

キーワード：平安時代／施釉陶器／窯業／分類・編年／篠窯

はじめに

平安時代における最高級の国産の焼物は、緑釉陶器である。大阪大学では丹波の篠窯跡群の調査を継続してきたが、西山1号窯の調査では近江産に近似する緑釉陶器が出土するという新知見を得て、近江や東海地方から平安京近郊窯への新たな技術移入が明確化した〔高橋ほか2020〕¹⁾。本稿では、近江系緑釉陶器の比較研究の前提として、改めて近年の知見を踏まえつつ、近江における緑釉陶器生産の実態について基礎的な考察を試みたい。

1. 調査・研究の現状と成果の再整理

筆者は、近江における緑釉陶器生産に関して1994年段階に考察をまとめた〔高橋1994〕（以下、旧稿と呼ぶ）。それから既に四半世紀が経っており、その間に重要な調査や研究も増えている²⁾。なかでも、甲賀市の春日杭原窯や春日伴城窯などの新たな窯の発見〔林2008・2013〕と、同じ甲賀市の春日北窯（春日北遺跡）における発掘調査〔滋賀県教委ほか2012、平井2013〕は特筆されるものであり、本稿ではその成果を再検討する³⁾。

上記のうち春日北窯の成果を筆者なりに整理すると、①窯の集中的操業、②初現期における東海系灰釉陶器・緑釉陶器の生産、③各種の窯構造の存在、④各時期の窯の生産実態、などの諸点の判明が重要であろう。

①に関しては、丘陵裾に複数の小型窯が集中的に操業していた。近江ではこれまで窯の確認が少なかったが、春日北窯と同様に各所で集中的に窯が構築されている可能性も推察でき、緑釉陶器需要の増大に対応した生産の拡大が生産地でも無理なく理解できるようになった。

②については、春日北2号窯が灰釉陶器と緑釉陶器素地を焼成する窖窯だと判明した。旧稿では窯道具から窖窯の存在を推測していたが、その点が実証されたことになる。また、旧稿において近江の緑釉陶器生産は東海系の技術が移入されたと論じた点も裏付けられた。さらに、山の神窯などでの灰釉陶器生産を否定した一方で、初現期における様相を留保していたが、⁴⁾ その実相が明確になった点も大きな成果と言える。

③に関しては、②で述べた窖窯以外に、続く春日北6号窯は焚口が二つある小型の平窯であると推測された。このような小型三角窯（双口式小型平窯）は、篠窯や洛西窯など平安京周辺で確認されているが、東海の小型窯は双口式小型三角平窯とは異なるので、現状では平安京近郊窯の工人との新たな接触があった可能性がより高い。

また、春日北1・3～5号窯は作谷窯と同様に小型窖窯の焼成部に分焰壁を設けており、いわゆる有牀（有畦）式であった。春日北1号窯で確認できたように分焰壁の上に粘土塊を載せることにより上部の床面を形成する方式は、篠の窯構造との関係を想定でき、有畦式小型窯の成立には双口式小型平窯の導入を前提として考えるのが自然であろう。

ただし、瓦窯に一般的な分焰壁に加えて、その燃焼部側に分焰柱を設けていること、窯の煙道より山手側に廃棄土坑を設けており、焼成部側より窯出しすることなど、瓦生産に用いられた有畦式平窯との関係を考えざるをえない。そのような窯構造の在地化は、製品の高台に典型的に確認できるような近江の地域色の顕在化などと軌を一にするものと判断される。

④については、春日北2号窯→同6号窯→同5号窯→同1・3・4号窯という変遷観が導かれた。ただ、器形と装飾手法の関係や推移についての系統化も必要なため、本稿では他の窯も視野に入れて再検討してみたい。

2. 緑釉陶器の分類

(1) 碗の器形分類

近江産緑釉陶器の器種としては、碗皿類が圧倒的多数を占める。新たな知見を踏まえつつ、碗については4種に区分し（図1）、区分名称も旧稿を改めて、筆者の東海産緑釉陶器の分類〔高橋1995〕と統一した。

F類 腰の張りは弱く、体部が直線的に立ち上がり、口縁部があまり外反しない。口縁端部に押圧輪花を施し、底部内面には圈線が施されることが多い。堀真人氏の分類のD類〔滋賀県教委ほか2012〕に相当する。

G類 腰の張りが強く、体部は内湾気味に立ち上がるが、器高はあまり高くない。口縁部はわずかに外反する程度で、高台径は口径に比して比較的大きい。筆者旧稿の碗Aに該当する。

H類 腰の張りが強く、身は深手である。口縁部はほぼまっすぐに終わるか、短く外反する。高台は比較的高い。旧稿の碗Bに当たる。

I類 腰の張りは弱く、体部は外傾気味に伸びて、口縁部は緩やかに外反する。口径に比して高台径は小さい。体部に押圧する輪花が施されることもある。

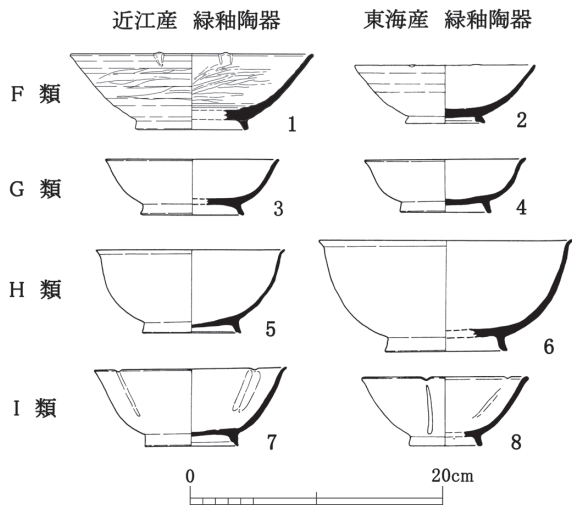


図1 近江産緑釉陶器碗類の器形分類

1：春日北2号窯、2：二川・苗畑5号窯、3：平安京右京二条三坊SD14、4：多治見・北丘15号窯、5：作谷窯、6：尾北・篠岡100号窯、7：平安京左京三条一坊（烏丸線立会17）井戸1、8：猿投・東山72号窯 縮尺1／6

旧稿の碗Cに対応するものである。

(2) 輪花手法の分類

次に、輪花手法の分類をしておく。輪花とは、器物を上からみて花卉状に成形する装飾技法のことで、口縁端部に施すもの（仮に口端輪花と呼ぶ）が基本であるが、それに合わせて体部に施すもの（体部輪花と仮称）もある。ここでは、近江以外の緑釉陶器も含めて分類をしておきたい。

口端輪花では、端部をヘラ状工具などで切り込んで形作るもの（口端切り欠き輪花）と、端部を押さえて変形を加えるもの（口端押圧輪花）がある。

体部輪花では、内面に粘土を貼り付けて花卉状のふくらみを作り出すもの（体部貼り付け輪花）と、外面に刻線を施して分割するもの（体部線刻輪花）があり、基本的には、体部の貼り付け輪花と線刻輪花はセットとなるが、片方みの場合もある。その他には、本体が柔らかい成形段階で体部外面から細長く縦方向に押圧で変形を加え、内面もその押圧の両端をおさえてなであげるもの（体部押圧輪花）がある。体部押圧輪花は口縁端部まで連続して及ぶ場合もある（口端・体部一体押圧輪花）。

以上は多様な組み合わせができるが、大別すると3種となる（図2）。

輪花a類 近江では確認できず、東海地域の緑釉陶器に認められるもので、口縁端部を切り欠き輪花、体部内面中位に貼り付け輪花、その外面には縦にヘラ描きの線刻輪花である。口縁端部の切り欠きや外面の沈線などの要素が欠けるものなど、多様なものを確認できるが、いずれもa類に含めておく。この種は既往の分類では、齊藤孝正氏による分類のⅠAa、ⅡAaに当たり〔齊藤1983〕、増子

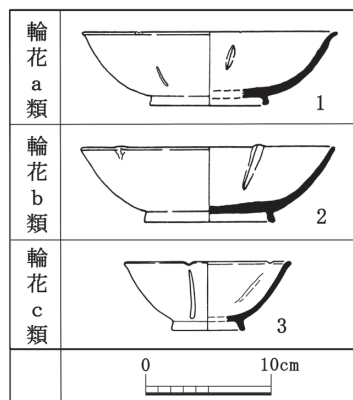


図2 輪花手法の分類

1：黒笹90号窯、2：黒笹89号窯、3：東山72号窯 縮尺1／6

康真氏による分類の図1〔増子1984〕にほぼ相当する。輪花a類は、筆者の緑釉陶器分類〔高橋1995、上掲以外の碗皿類の分類は以下これによる〕の碗A・皿A（口縁が外反）に主に施され、碗Eや皿E（体部に稜）などにも例外的に確認できる。輪花は、四単位を基本とする。それは、碗A・皿Aの口縁内面の陰刻文が四単位であることも共通する。輪花a類は、灰釉陶器に施されることがほとんど認められない。

輪花b類 口縁端部を押圧し変形させたものである（押圧輪花）。内面に口縁端部より細長く粘土帯を貼り付けたものと、貼り付けないものがある。また、a類同様、外面にヘラ描き沈線を施すものもみられる。口縁体部の押圧がやや体部にかけて長めに施される場合もあるが、一般には次のc類ほど長く及ぶものではない。齊藤孝正氏の分類のⅡAb、ⅣA1、ⅣBa、ⅣBb1に当たり〔齊藤1983〕、増子康真氏の分類の図2～4に相当する〔増子1984〕。輪花b類は、碗F・皿F・段皿などに施され、基本的に五単位である。また、輪花b類が施されるものは、一般的に内面底部に一条の圈線がみられ、輪花b類と一体の装飾となる。輪花b類は、灰釉陶器に施される例も存在するが、その場合は上記の原則が崩れているものが多い。

輪花c類 体部中位を細長く外面から押圧を加えるものである。口端・体部一体輪花（c2類）と、口縁部は主に切り欠きの輪花を施し、体部に押圧輪花を加えるもの（c1類）などがあるが、まとめておく。齊藤氏の分類のⅣA2、ⅣA3、ⅣBb、ⅣBb3に当たる〔齊藤1983〕。この手法は近江産緑釉陶器には比較的多く確認でき⁵⁾、灰釉陶器においても認められる。

(3) 高台形態の分類

碗類の高台形態に関しては、旧稿を踏襲した分類を用いる（図3）。

高台a類 高台高は高く、幅が狭い。下端が水平で、平坦かややくぼむ。

高台b類 高台高が高めで幅が狭い点で、a類と共通する。下端がやや内傾し、凹線が巡って段状のものが多いが、平坦面に近いものもある。

高台c類 高台高が低く、幅が広い。下端はやや内傾し明瞭な段をなす。

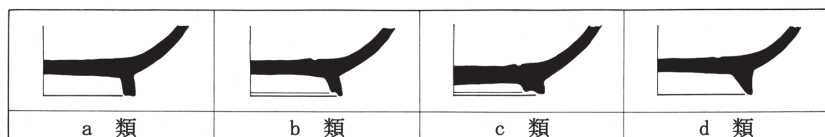


図3 近江産緑釉陶器碗類における高台形態の分類

高台d類 高台が断面三角形形状をなす。高台高は比較的高い。

なお、上記の分類は典型的な高台形態を示すものであって、この分類から外れる形態も存在する。例えば、高台の下端面がほとんどくぼまない形態のものは、春日北窯の報告〔滋賀県教委ほか2012〕においてa'・b'・c'と表現している。またd類に似た形状であるが、ごくわずかに高台の内面側に沈線状に段の痕跡をとどめるものもあり、春日北窯の報告では、そのような段を持つものをd類、ないものをe類としている⁶⁾。確かに、必要に応じて細分するのがよりふさわしい。ただ、細分の難しい個体もあり、大きな傾向をみるために、以下では旧稿を踏襲し、基本的にa'・b'・c'は上記のa～c類に含めて、d・e類はd類にまとめておくことにする。

これらは、碗類では概ねa類→b類→c類→d類の順に変遷していくものと考えられる。ただし、後でも触れるように、各類は併存しながら量的に変化するものとみた方が良く、器形差も考慮する必要がある。

3. 窯跡出土品の再検討

(1) 春日北2号窯

以下では、編年の位置づけを中心とした再検討をしていきたい。まず、発掘調査が行われた春日北の諸窯を取り上げていくことにする（図4～6）。

窖窯の春日北2号窯からは、緑釉陶器（素地）（図4-1～8）や灰釉陶器（9～15）などが出土している。緑釉陶器の碗では、G・H類の可能性が高い深めのものもあるが（4・5）、F類（7・8）が大半である。このF類は体部が直線的に立ち上がり、口縁部が外反しないもので、口縁端部に押圧の輪花

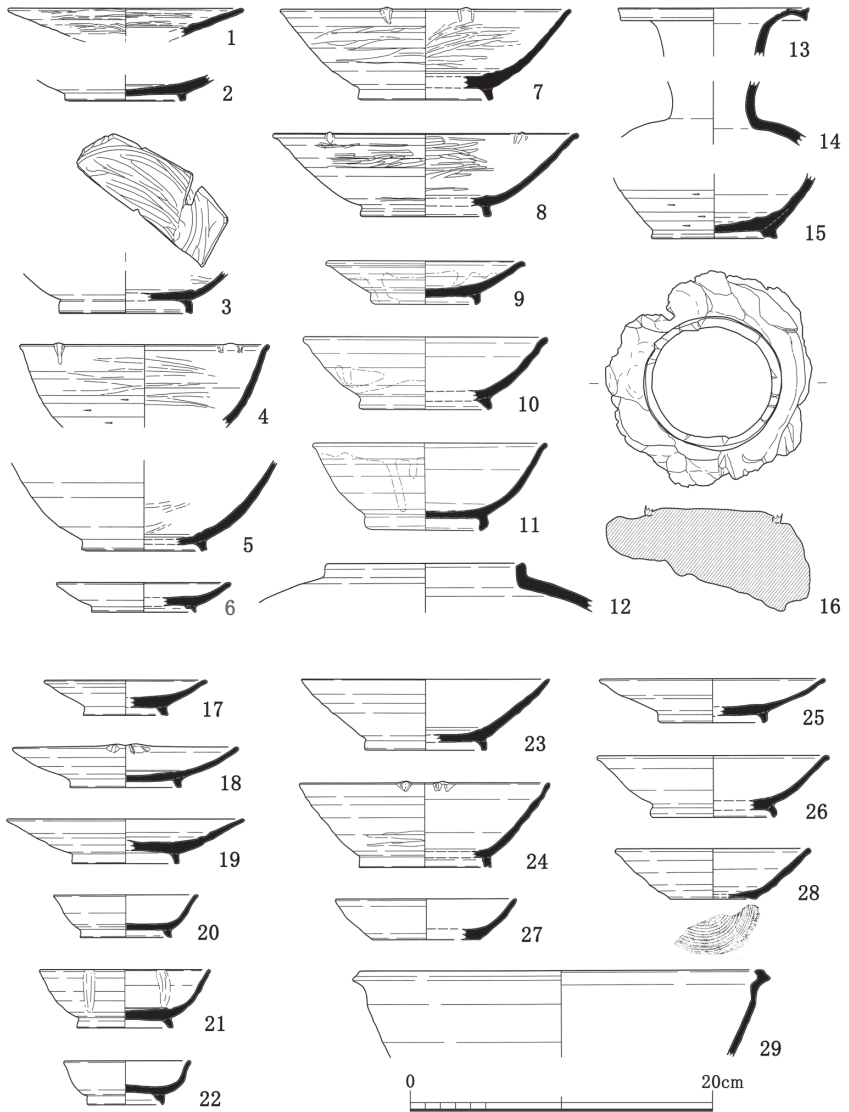


図4 近江における緑釉陶器窯出土資料 (1)

1～16：春日北2号窯、17～29：春日北6号窯 縮尺1／5

を施し、底部内面にはほとんどに圈線が施されている。高台はやや高めの角高台でa類である。東海の緑釉陶器窯では、二川窯〔豊橋市教委2000〕などで本窯に近い形態を示す器高が低い椀Fを確認できるものの（図1－2）、器高の低いものは必ずしも緑釉陶器に通有の形態ではない。その器高の低さは春日北2号窯で焼成する灰釉陶器（図4－10）にも近いため、灰釉陶器の器形と混交して、緑釉陶器も浅い器形となっている可能性がある。

この春日北2号窯における他の出土品も確認しておく、先述の椀Fでは断面方形のa高台が付くものが多いが、皿にはc類としたような低い有段高台が確認でき（6）、その個体はミガキも明瞭ではない。灰釉陶器の皿と比較しても非常に小型であり、後続する窯からの混入品の可能性を考えておくべきだろう。一方、皿類では入念なミガキの段皿が存在しており、これは同時期の緑釉陶器素地とみて問題がない。改めて整理すると、緑釉陶器に関しては、上記の有段高台の皿を除けば、断面方形のa類の高台で、内外面ともにミガキ仕上げで、底部の糸切り痕はナデ消していると言えよう。

灰釉陶器の椀皿類は漬け掛けが主流で、三日月（鉤爪）⁷⁾ 高台を有している。ただし、高台の細く高い深椀が確認されない点で古相を示す。また、底部の糸切り痕を消す点も、9世紀以来の古い要素を保つ。この他に、灰釉陶器では壺類などの器種が豊富で、須恵器では甕などが出土している。

(2) 春日北6号窯

2号窯に後続する双口式小型窯の春日北6号窯は、緑釉陶器（図4－17～24）が7割ほどで、灰釉陶器（25・26）の生産が続いており、須恵器（27～29）も出土する。緑釉陶器は有段高台がみられ、ミガキを施さないものが主体になる。底部の糸切り痕も4割ほどが残したままである。

器形としては、先の2号窯にみられた椀Fの系譜を引くものが継続する（23・24）。皿類でも椀Fに対応した皿Fが存在し（18）、輪花と底部圈線を有しており、直線的に体部が伸びる。口径は14～15cmであり、同様の法量の段皿（19）や通例の皿と、より小型の皿（17）などがある。上記の椀皿

類は、いずれもa類の高台を有しているようである。

他に、平安京右京二条二坊出土の「天曆七」年(953)銘緑釉陶器碗(図9-2)〔京都市埋文研1983〕に類似し、体部が直線的に立ち上がるものもある(碗G・Fにも似るが、仮に碗Bとしておく、図4-20・21)。その中には、輪花c2類も確認でき、碗Iの影響によるのだろう(21)。

なお、灰原からは、内湾気味に立ち上がるG類系統の製品があり、低く明瞭な有段高台c類も多いが(22)、3～5号窯などの焼成品が混じる可能性を考慮すべきであろう。灰釉陶器については、釉が施されているものは一点しか確認できないようであり、焼きの悪いものが増えている。

この他に、須恵器では端部で屈曲する独特の鉢が出土しており(29)、丹波の篠窯の製品と類似する。ただ、9世紀末の西長尾3号窯段階に近い形状であり、古相をとどめる⁸⁾。また、須恵器杯では体部の長さでみると2種の形状が出ており(27・28)、体部の短いものは平安京近郊窯に一般的なものである。平安京近郊窯の窯構造を取り入れているとみられる春日北6号窯は、平安京近郊の要素を製品でほとんど確認できないが、上記の須恵器類がその可能性を有する数少ない事例である。なお、須恵器では甕が出土しているが、同種の叩きのものは2号窯でも出土しており、窯の規模を考慮すると、おそらく窖窯の2号窯で焼成されたのであろう。

(3) 春日北5号窯

6号窯に続く、有畦式とみられる小型窖窯の春日北5号窯は、緑釉陶器(図5-1～8)が8割で、灰釉陶器や須恵器が残り占める。緑釉陶器素地には碗・皿・耳皿などがある。碗類は、腰の張りの強いG類がみられる(6)。その一方で、細長く輪花c類を施すものがあり、碗Iも焼成されていた(8)。また、体部が傾き、やや直線的に立ち上がるもの(5・7)は輪花c類ではないものを含むが、碗I類に相当する形態で、春日北1号窯のF類よりやや器高が高くなり体部の内湾度が増す。高台形態は、ほとんどがb類の高めの有段高台を有しており、方形のa高台がおおむねみられなくなる。底部糸切り

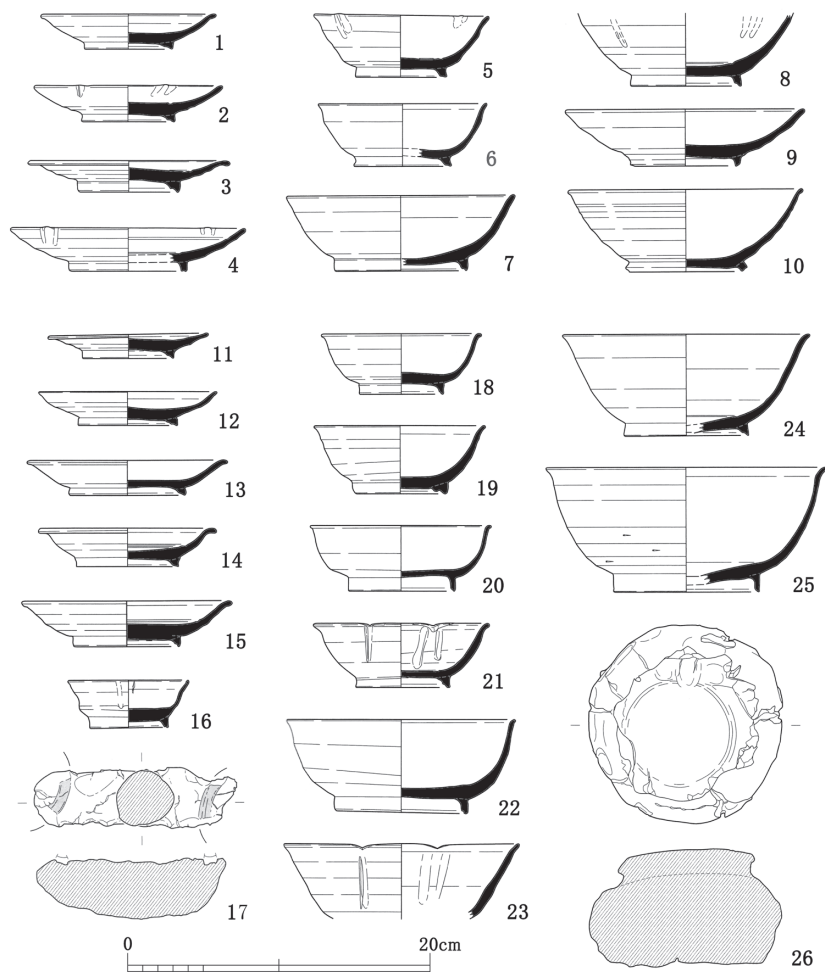


図5 近江における緑釉陶器窯出土資料 (2)

1～10：春日北5号窯、11～26：春日北1号窯 縮尺1／5

痕は6割以上がそのまま残している。

皿類にもF類とみられる輪花椀が残存しており(図5-2)、通例の皿(1)や段皿(3)も確認できる。皿類では、椀類に比して高さが低くて段が明瞭なc類とした高台が一般的である。特殊なものとして、輪花が施される大型

の皿で、体部中位の内面に沈線がめぐり、稜皿を意識したようなものもある(4)。ただ、その高台形態は、a類の形態であることから、古い時期の窯の製品が混入したのかもしれない、少なくとも古相をとどめる。

灰釉陶器系統の器種(9・10)では、灰釉が施釉されなくなっている。高台形状も一般的な鉤爪形でなくなり、内端部が設置する台形状のものが目立ってくるため、湖東型無釉陶器(須恵器)と呼ぶのがふさわしい。

(4) 春日北1・3・4号窯

次に、春日北1号窯は近江特有とみられる有畦式小型窖窯であり、独特の窯道具(図5-17)なども用いる。灰釉陶器の生産は基本的に行わない。緑釉陶器では、ほとんどが段を持つ高台で、G類系統の椀が主体である。ただ、身の深い椀H類(25)が存在し、その高台は非常に高いb類である。口縁部の切り込みによる輪花を施した椀I類も確認できる(21・23)。

椀G類と呼ぶべき腰の張りが強いものは、概して高めで段が弱いb類の高台を有している(18・20・22)のに対し、輪花の有無はともかくも、腰の張りが弱く、体部がやや寝ているタイプのI類系統の椀は、高台幅が広めであり、その下端面が斜めになって段の明瞭なc類が多い(19・21・24)。このような体部や高台形態で大別される2種の椀は、法量的にはほぼ同様の分化を示しており、おそらく同時併存していたのであろう。この他に皿・段皿の多くは、5号窯でもみられるように、低く段の明瞭なc類の高台である。このように、高台の形状には器形による差違を想定できる。

春日北3・4号窯については、1号窯とほぼ同様の生産内容である(図6)。ただ、椀I類などの切り込みによる輪花は目立たず、椀Gとの器形分けもあいまいなものが多いなど、微差が認められるようである。ただ、椀G類ではb類でも高台幅の部厚いものがある一方、後述する峰道窯にあるような高台の低いc類は必ずしも多くはない。

春日北3・4号窯では、特殊品として稜皿に当たる皿E類が確認できる(図6-4)。この頃には体部に稜を持つ折縁皿も灰釉陶器の新器種として出現し

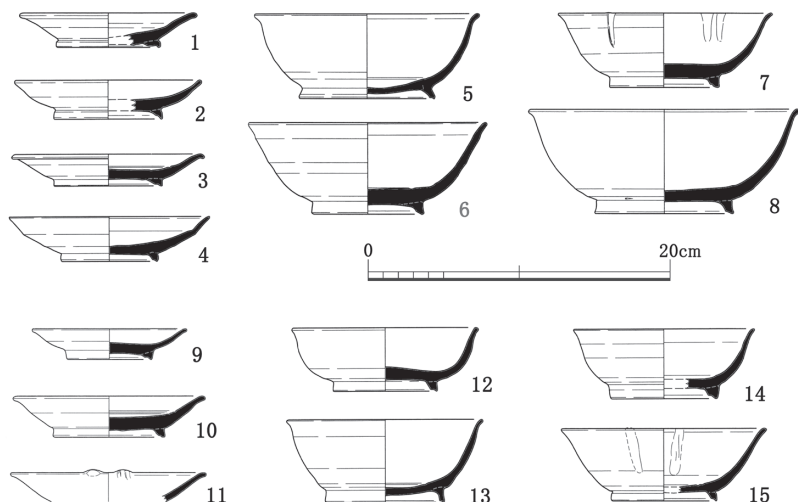


図6 近江における緑釉陶器窯出土資料 (3)

1～8：春日北3号窯、9～15：春日北4号窯 縮尺1/5

ているが、外反の形態が異なる。高台形態からすると、少し古い時期のものの混入と推測される。9世紀以来の系譜を引く稜皿形態（E類）が近江でも採用されて、わずかな量だとしてもF類と同様に生産されていたのだろう。10世紀の東海の窯でも、例えば瀬戸窯に属する豊田市の来姓2号窯〔豊田市教委 2008〕や二川窯に含まれる豊橋市の苗畑5号窯〔豊橋市教委 2002〕などでは、類する稜皿が出土している。椀皿のE類で稜がやや甘くなっているものなどは、東海でも10世紀代に生産されており、同様に近江でもそのような古い器形の系譜をひくものが残存していたことになる。⁹⁾

(5) 春日杭原窯ならびに峰道窯

次に表面採集された資料のうち、春日杭原窯を取り上げる（図7）。

春日杭原窯（1～20）は、『甲賀市史』のなかでは、ヘラケズリと糸切りのナデ消しといった丁寧な作りや灰釉陶器の共伴などから春日北6号窯に近い内容で、10世紀前葉から中葉とされている〔林2013〕。

特徴的な器形は、口縁部を切り欠き、胴部に押圧を施す輪花を有しており、体部が傾く形態の椀Ⅰである（11～14）。また杭原窯では、椀Ⅰよりも腰が張る形の椀Ⅱ（5～10）も出土しており、椀Ⅰと明確に作り分けをしている。椀Ⅰは、消費地で確認できたものの、窯資料では必ずしも明確ではなかったが、この春日杭原窯で初めてまとまって確認できるようになり、その後には春日北1号窯（図5-21・23）などでも出土をみるようになった。

杭原窯では精製品が多いが、それは輪花を有する椀Ⅰなど東海地域と同様の新器形を導入した窯である点を考慮すべきで、単純に調整の丁寧さなどでは時期差には還元できない。¹⁰⁾ また、切り欠きの輪花c類は東海の窯でも東山

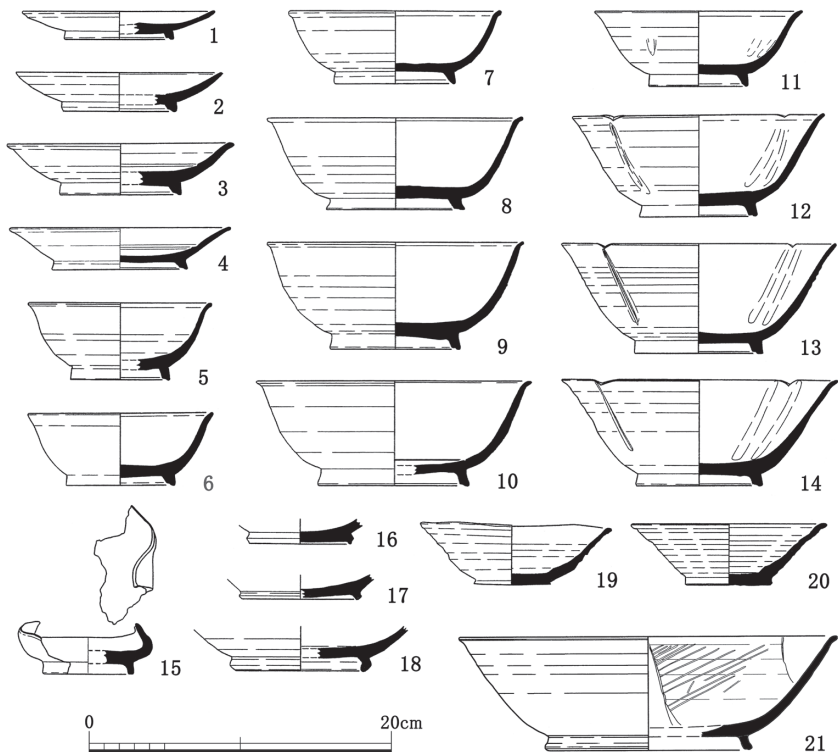


図7 近江における緑釉陶器窯出土資料（4）

1～20：杭原窯、21：伴城窯 縮尺1／5

72号窯を嚆矢として10世紀後半（美濃・虎溪山1号窯式）に確認できることから、春日北2号窯にまでは遡らないであろう。¹¹⁾さらに、高台部は近江に典型的な有段高台であり、春日北6号窯より後出的である。高台形態や輪花手法を重視すれば、春日北6号窯と部分的に併行するかもしれないが、5号窯とはほぼ同時期の操業と推測できよう。なお、近江に典型的な有段高台内側の内傾化（a類→b類）は、おそらくこの椀Iの模倣対象が採用していた三角形状に近い高台形態に由来するものであろう。

この杭原窯と比較しておきたいのは、春日峰道窯である〔松澤1980・1988〕。旧稿でも述べた通り、峰道窯の椀では、体部が大きく内湾し、腰の張りが強いもの（図8-12・13・15）と、腰の張りか弱いもの（8-11・14）の二種が存在する。前者は、基本的に細く高いb類の高台を持つのに対して、後者は、低く段の明瞭なc類の高台である。また、後者は口縁端部の押圧による輪花があるが、前者では基本的に輪花がみられない。峰道窯で二種の製品が生産されている様相は、春日北1号窯と類似している。

その位置付けとして、旧稿では峰道窯に2基の窯が存在したものとみられていることから、両者の椀形態は時期差を示すものと判断した。ただ、春日杭原窯ならびに春日北窯の資料からすると、むしろ別の想定が必要である。つまり、先述の前者が春日杭原窯にみられる椀G（図7-5-10）、後者が椀I（11-14）の系譜を引くという考えである。そのように考えてよければ、腰の張りの差や輪花の有無との相関が明瞭になる。

その一方で注意すべきは、峰道窯で輪花を持つものは、口縁端部にのみ押圧で施しており、体部には押圧が加えられていない点である。しかも、近江産を特徴づけるように、底部内面に圈線を施すものが多い。この口端押圧輪花と底部内面圈線はいずれも椀Fに通有の手法であり、その要素を引き継いだとみるほうが良い。春日北窯などでは遅くまで椀Fの系統の手法が残っており、十分にその可能性が成り立つだろう。

整理すれば、春日杭原窯でみられるように椀Iの新たな流入の後に、椀Iの器形を引き継ぎつつも、輪花を持つ点で共通する椀Fの装飾手法を取り入

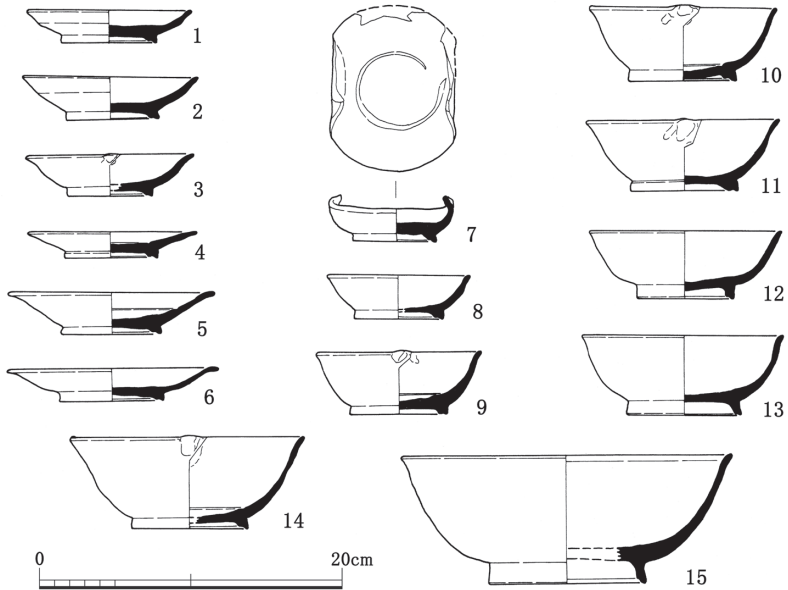


図8 近江における緑釉陶器窯出土資料 (5)

1～15：峰道窯 縮尺1/5

れて、融合した形が峰道窯の様相と言える。おそらく春日北窯のように各所で碗Iと碗Gなども作り分けが不明確となる場合も起こり、本来の器形の区分が乱れて量産されていくのだろう。10世紀後半における近江産緑釉陶器の口端輪花や底部圏線の流行は、上記のような併存する碗の型式変容をとらえることによってスムーズに理解ができるのである。

(6) 春日伴城窯

最後に春日伴城窯を取り上げると、緑釉陶器素地において段が明瞭とならない高台で、器表面にミガキがあるなど古相を帯びており、10世紀初頭から中葉の操業が推測されている〔林 2013〕。伴城窯の採集資料は少なく、しかも新しい時期とみられるものも含まれているので、より詳細は今後の資料増加などを待たざるをえないが、図示資料を検討の俎上に載せたい。

伴城窯採集の椀（図7-21）は、残存部分に輪花が認められないが、東海産緑釉陶器の椀F（五輪花椀）に近い形態である。春日伴城窯のように体部の立ち上がり強い実例としては、平安宮西限隕23出土品（図9-1）が挙げられ〔京都市埋文研1986〕、近江産とみられる。西限隕23例では、輪花や底部圏線をもつ椀Fであり、伴城窯のものも椀Fとみなしてよからう。

近江産の椀Fとして春日北2号窯のもの（図4-7・8）などと比較すると、ミガキや高台形態で共通するものの、伴城窯などはかなり体部の傾きが強いなど、形態に微差が認められる。春日北窯よりも伴城窯例のほうが9世紀末から10世紀初め頃の東海産緑釉陶器椀Fの諸要素を引き継いでおり、近江における緑釉陶器生産の開始期を示す資料であろう。

4. 近江産緑釉陶器の編年案

(1) 消費地資料の検討と実年代観

改めて本稿の高台形態の分類に従い、椀類の生産内容を確認してみた結果が表1である。先述の通り、器形によって高台の偏差が併存し、例えば皿類は早くにc類を採用し、逆にG・H類のうち法量大きいものはb類を維持する傾向が強い。そのため厳密には種々考慮すべきだが、概ねa類からb類、c類、d類への変遷が想定され、窯の操業時期を反映するとみて良からう。

近江の開窯時期については、森隆氏が10世紀第1四半期に引き上げる見解を示していた〔森1991〕。その根拠とされた平安宮西限隕23出土資料（図9-1）〔京都市埋文研1986〕は、伴出土師器から平安京土器編年〔平尾1990ほか〕では大略Ⅱ期新（900～930）頃に比定でき、文献史料との対応からすると、延喜10年（910）から天慶2年（939）頃までに投棄されたものと推測される。¹²⁾ その遺構の性格などを考慮すると、第1四半期に限定できるかは議論の余地を残すが、10世紀前半代に置くことはでき、春日北2号窯なども10世紀前半とみなしうる。

この他に、山本信夫氏が指摘している資料として、太宰府市国分川添遺

跡 S15 から口縁端部に輪花を施し、底部内面に圈線をめぐらせる碗が出土している〔山本 1999〕。口縁部がやや外反するなど、東海産の一般的器形とは言えないので、山本氏も指摘する通り、初期の近江産の可能性が高い。

これはⅧ期の資料群で

あり、筆者の年代観では 10 世紀前半とみている¹³⁾。以上の点から、開窯を 10 世紀前半代に置くことは問題なく、資料の増加を待つべきだが、10 世紀の第 1 四半期に遡る可能性は十分にある。

また、平安京右京二条二坊出土の「天曆七」年（953）銘緑釉陶器碗（図 9-2）は、形状的には特殊なものながら、春日北 6 号窯（図 4-20）などでも類品が出土し、近江産と考えざるをえない〔京都市埋文研 1983〕。典型的な近江の有段高台が発達する以前の段階に位置付けられる。春日北 6 号窯も、10 世紀中葉を中心とする時期であろう。

平安京右京二条三坊十五町 SD14 出土緑釉陶器（図 9-3）は、東海産の可能性もあるが、調整などから考えて、高台下端がいまだ明瞭な段をなさない段階の近江産緑釉陶器の碗 G と判断することができる〔京都市埋文研 1987〕。この遺物群は平安京Ⅲ古段階（930～955 頃）の標識的な資料であり、a 類の高台形態が 10 世紀前半代のものであったことを示している。

平安宮内裏 SK25 から、細く高めで明瞭な段を有する b 類高台の近江産緑釉陶器碗が出土している（図 9-4）〔京都市埋文研 1988〕。この遺物群は、「應和」の墨書品を含み、天徳四年（960）の火災後の整理によるとみなされる。b 類の高台は 10 世紀第 3 四半期には出現していたことになる。

表1 近江の各窯跡出土緑釉陶器碗類の高台形態

	a 類	b 類	c 類	d 類
伴 城 窯	○			
春日北 2 号窯	◎			
春日北 6 号窯	○	○	○ ?	
梶 田 窯	○	?		
十 禅 谷 窯	○	○		
杭 原 窯		◎		
山 の 神 窯		○	○	
春日北 5 号窯		◎	○	
作 谷 窯		◎	○	
春日北 4 号窯		◎	◎	
春日北 3 号窯		◎	◎	
春日北 1 号窯		○	◎	
峰 道 窯		○	◎	

凡例：◎主体的に出土 ○定量的に出土

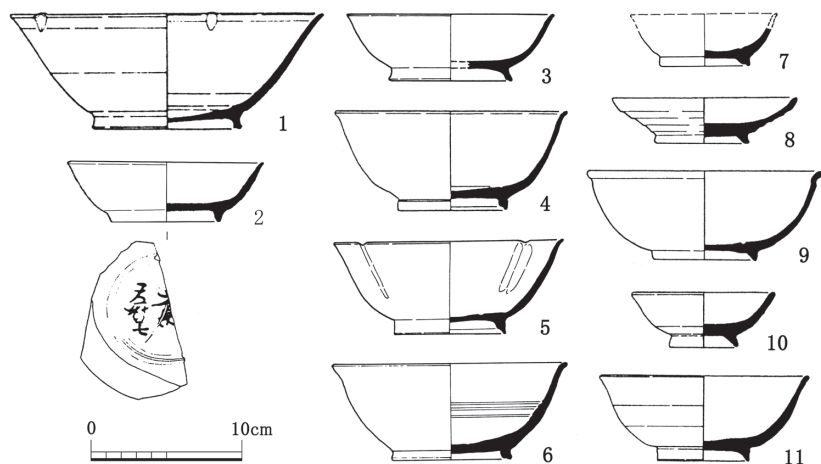


図9 消費地出土の近江産とみられる緑釉陶器

1：平安宮西限障23、2：平安京右京二条二坊三町SX1、3：平安京右京二条三坊十五町SD14、4：平安宮内裏SK25、5：平安京左京三条一坊（烏丸線立会17）井戸1、6・7：薬師寺西僧房焼土層、8・9：平安京左京北辺三坊六町内膳町SK18、10・11：平安京左京二条三坊九町SE273中層 縮尺1/5

また、平安京左京三条一坊（烏丸線立会17）井戸1は、比較的高めでb類の範疇に入る高台を持つ近江産緑釉陶器碗Iであり、体部にも輪花が施されている（図9－5）〔京都市高速鉄道1981〕。この遺構は、平安京Ⅲ中段階であり、実年代が955年～980年頃の資料である。碗Iが10世紀第3四半期には出現し、b類の高台が主体をなしていたことも裏付けられる。

薬師寺西僧房は、天禄四年（973）に焼亡しており、その焼土層からは近江産とみられる緑釉陶器が出土している（図9－6・7）〔奈文研1987〕。そのうち6は、被熱資料でその焼亡に伴うものとみられるが、7は破片であって火を受けているわけではない。後者は火災後の投棄によるもので、973年より後の可能性がある。いずれにせよ、この年代前後にc類に近い低い有段高台の製品が存在していた。碗におけるc類の出現は、10世紀の第3四半期に食い込む可能性があるが、その主体は第4四半期なのだろう。

平安京左京北辺三坊六町内膳町SK18からは、三角形をなすd類の高台を持つ近江産緑釉陶器が出土している（図9－8・9）〔京都府教委1980〕。

また、平安京左京二条三坊九町 SE273 中層からも、同種の d 類高台の緑釉陶器が出土する（図 9 - 10・11）〔古代学協会ほか 1994、古代の土器研 1994〕。前者は、平安京Ⅲ新段階で、980～1005 頃、後者は平安京Ⅳ古段階、1005～1030 年頃に比定されている。d 類が 10 世紀末か 11 世紀初めに出現していたことは間違いない。その残存時期は、11 世紀の第 1 四半期で収まるのか、さらに第 2 四半期以降まで続くのかは、絞り込むのが現状では困難であるが、概ね 11 世紀前半に d 類が生産されたと考えてよからう。

(2) 近江産緑釉陶器の変遷

ごく簡単に近江産緑釉陶器編年をまとめると、以下のようになる（図 10）。

I 期（10 世紀前半）

この時期は、高台が基本的に a 類である。碗としては F 類が主体であり、G・H 類も出現するものとみられる。その他に皿・段皿などが存在する。底部は糸切りをナデ消し、全面施釉するものが多い。器表面にミガキを施すものや、底部付近にケズリ調整がなされている個体もある。釉調としては、次の段階よりも緑色が薄いものや黄色味を帯びたものが認められる。この段階の緑釉陶器窯では、灰釉陶器やそれを模した須恵器も併焼されている。

この時期の窯としては、春日北 2 号窯が挙げられ、この I 期から II 期にかけての窯としては、春日北 6 号窯や十禅谷窯がある。資料数が乏しいが、春日伴城窯はこの I 期でも古い時期から開始するものと判断され、梶田窯はいわゆる湖東型無釉陶器（須恵器）の形状からすると、II 期に入る前後の可能性はある。この時期は、生産量もいまだ多くはないものと推測される。

II 期（10 世紀後半）

この時期は、古段階と新段階の二つに細分できる。高台形態は典型的な近江産緑釉陶器の b・c 類を採っているが、古段階では b 類が、新段階では c 類が主体である。碗としては、新たに碗 I 類が登場する。しかし、それらの器形差もかなり不明瞭になる場合が多い。この他に皿や段皿・耳皿などがある。輪花手法は II 期古段階を中心に縦に長く、外面から押圧を加える輪花 c

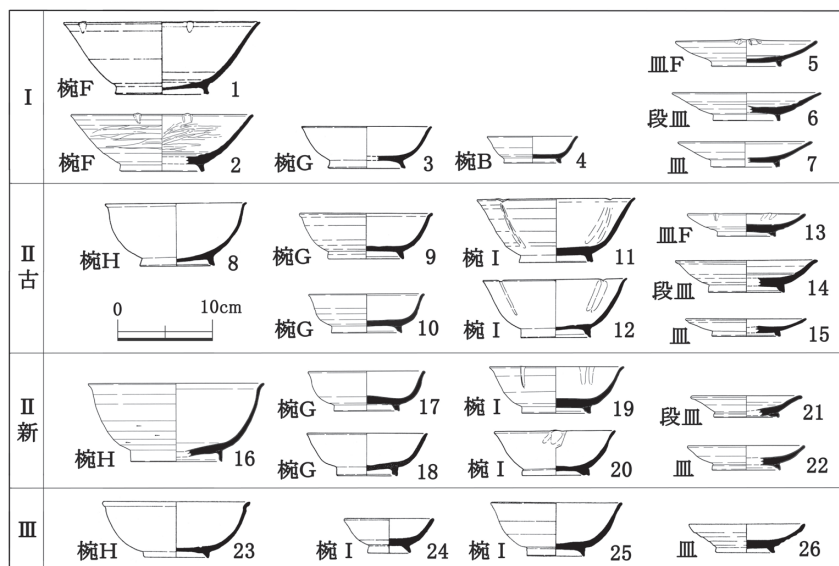


図10 近江産緑釉陶器編年図

1：平安宮西隈限23、2：春日北2号窯、3：平安京右京二条三坊十五町SD14、4～7：春日北6号窯、8：作谷窯、9・11・14・15：杭原窯、10・13：春日北5号窯、12：平安京左京三条一坊（烏丸線立会17）井戸1、16・17：春日北1号窯、18・20：峰道窯、19・21・22：春日北3号窯、23・26：平安京左京北辺三坊六町内膳町SK18、24・25：平安京左京二条三坊九町SE273中層 縮尺1/8

類が確認できるが、新段階では口縁端部のみを押圧するb類系統のものが少なくなる。底部は糸切り未調整のものが目立ち、施釉範囲も底部外面に施さないものが多い。釉調は濃緑色を呈するものが大半である。緑釉陶器窯で併焼される灰釉陶器はほぼ消滅し、形状的に灰釉陶器の系譜を引く須恵器についても、古段階では認められるが、新段階では減少する。

具体的には、Ⅰ期にかかってもよいかもしれないが春日杭原窯がⅡ期の古段階、山の神窯と作谷窯や春日北5号窯がⅡ期でも古段階のものを中心に新段階にかけて操業し、春日北1・3・4号窯、峰道窯の主体のものが新段階に当たる。窯数が増加するとともに、生産量が増大し、最盛期を迎える。

Ⅲ期（11世紀前半）

暦年代としては11世紀前半としておくが、第1四半期を中心とする11世

紀初め頃の可能性もある。碗・皿類の高台はd類の形態を採っており、前段階でみられた高台下端面の段が消失するものと推測される。皿類は口縁端部が外反せず、内湾気味に終わるものが目立つ。焼成は多くが軟質で淡赤褐色を呈している。また、ほとんどが糸切り未調整で、施釉も基本的に部分施釉である。釉調はやや褐色を帯びた濃緑色を呈するものが多い。この時期の資料は消費地では確認できるが、窯は現在までのところ発見されていない。

最後に支群ごとの窯の展開過程をまとめれば、Ⅰ期には、水口春日で集中的な生産を開始している。日野中山の梶田窯は資料が少ないが、おそらくこの時期に入り、布引山丘陵の十禅谷窯もこの時期に遡る可能性があるというように、10世紀半ばには各支群での生産が展開していたと判断される。Ⅱ期には、水口春日では春日北窯が継続し、杭原窯・山の神窯・峰道窯、日野中山では作谷窯などが操業を行う。少なくとも10世紀後半頃には各支群の窯が併存しながら、最盛期を迎えたとみてよいであろう。

以上、近江における緑釉陶器の分類と編年を中心に基礎的な再整理を試みた。その結果、東海産緑釉陶器と軌を一にする動きとその後の独自化の過程や、平安京近郊窯の須恵器との関係なども浮き彫りにできた。とりわけ緑釉陶器における碗皿F類の設定とその変質をみることで、製品の変遷を系統だって追うことができたと考えている。さらなる歴史的な位置づけなどは、紙数の関係から別の機会を待ちたい。¹⁴⁾

[註]

- 1) 藤原重彦氏のご教示によると、篠窯の騎馬ヶ谷地区での採集品に、近江の杭原窯と酷似する輪花の製品が確認されるといった新知見もある。
- 2) 日永伊久男氏は、無釉陶器を緑釉陶器技術の習得、確立の過程で生まれた試作品と位置付けた〔日永1994〕。ただ、無釉陶器は灰釉陶器系統の形態であり、両者は分けて考える方が良い。畑中英二氏は、「石部宿山中」付近に未知の緑釉陶器窯を想定しており〔畑中2000・2003〕、現在も課題である。最近では春日北窯など

の成果を受けて新たな研究も提出されつつある〔中川 2016、伊藤 2017、大西 2020 ほか〕。また、白石純氏の胎土分析による研究も進展している〔白石 2020〕。

- 3) 春日北窯に関しては、滋賀県文化財協会の平井美典氏・堀真人氏などにお世話になり、春日杭原窯・春日伴城窯や北脇遺跡出土品に関しては、甲賀市教育委員会の林修平氏・小谷徳彦氏、甲賀市歴史民俗資料館(当時)の橘泉氏などのご援助を受けた。記して感謝したい。なお、杭原窯に関しては、明治八年の「近江國甲賀郡春日村地誌」では「杭原」(くいわら)の字が当てられていたようだが、現地名や遺跡名通りに「杭原」の地名を採用しておく。同様に、峰道窯も「峯道」のほうが適切かもしれないが、「峰道」と表記しておく。
- 4) 旧稿ではその当時に判明していた窯では灰釉陶器生産が認められないことを記し、初期段階の窯については今後の課題とした(p.333 註 40 ほか)。
- 5) 春日北窯の報告の分類〔滋賀県教委ほか 2012〕では、a 類・c 類が本稿の c1 類・c2 類に相当し、b 類が本稿の b 類である。c 類と同様で押圧が少ない d 類は、手法として本稿の c 類に含めたほうがよいが、b 類と区別が難しいので b 類(口端押圧輪花)に含めておく。他に、e 類として貼り付けの輪花を設けているが、この個体は一次焼成の割れを粘土補修したものの可能性が高い。
- 6) 高台の d 類については、d 類を主に生産する窯は確認されていない。同種の高台の灰釉陶器は東海で認められ、東海で生産されていた可能性は否定できないが、消費地例をみる限り、胎土や焼成などで近江産に近似するため d 類の製品を近江でも生産していたと考えておきたい。
- 7) 三日月高台の名称は定着しているが、唐津茶碗などの三日月高台とは異種で、三日月形とも言い難いので、代替案に鉤爪(形)高台を掲げたい。
- 8) 春日北窯出土の須恵器鉢については、石井清司氏・白石純氏などとともに実見をする機会を得た。胎土や形状の微差などから篠からの搬入ではないと推測される点で、石井氏とも意見の一致をみた。白石氏からも鉢の胎土に含まれる鉱物は、肉眼観察ながら同じ春日北窯の窯道具などにみられる胎土と変わらないとの教示を得た。この鉢の胎土は同じ窯の緑釉陶器や灰釉陶器とは異なるが、春日北窯で生産されていた可能性が高い。時期が遡る篠窯製品に類似する点は、一案として 10 世紀初め頃に平安京近郊窯にみられる須恵器鉢の器形が近江地域に導入されており、その形状が維持されていたことも想定できよう。
- 9) 例えば来姓 2 号窯〔豊田市教委 2008〕の場合、灰釉陶器において碗 F も焼成しており、稜皿の生産も古い系譜を引き継いでいるのだろう。
- 10) 同様の事例として猿投窯の東山 72 号窯は、ほぼ同時期とされる NN-282 号窯に比べて灰釉陶器の調整などが丁寧であるが、輪花碗(本稿の碗 I)などの新器種が出現しており、粗雑だけでは単純に時期差にできない〔名古屋大 2017〕。
- 11) 杭原窯の灰釉陶器(図 7 - 16 ~ 18)は西側寄りで採集されているらしく、他の窯

の資料の混入も考慮が必要である。これらの灰釉陶器に関する研究として、高台形態や調整などから古相（同－18）と新相（16・17）に分ける説もある〔中川 2016、大西 2020〕。ただ、東海の同一窯でも多様であって、単純に時期差かは判別が難しい。東山 72 号窯のような椀Ⅰの出現期の窯に、他窯より調整の丁寧な古相の灰釉陶器を伴う事例もあり、杭原窯の灰釉陶器の様相もそれほど不自然ではない。杭原窯の緑釉陶器の評価については、現状において灰釉陶器と切り分けておく必要があるが、杭原窯の灰釉陶器には、椀Ⅰが出現する春日北 5 号窯の灰釉陶器と同様の高台形状がある点で、年代的位置づけとして新相とされる一群と同時期とみても大きな矛盾はないようである。

- 12) 報告書では、本文に記す年代観を示しつつも、その年代に関して「出土遺構の性格を考えると過大評価することは危険」との但し書きも付している。
- 13) 他に、「延長五年」（927）銘木簡が出土した大宰府史跡第 74 次調査 SD205A〔九歴 1982〕からも近江産の可能性のある緑釉陶器が出土している。また森隆氏は大宰府条坊第 34 次調査 SK030 を挙げ、大宰府編年Ⅷ期であり「延長五年」（927）銘木簡よりも古いとして、10 世紀第 1 四半期とみなした〔森 1991〕。この資料は、山本信夫氏によりⅥb～Ⅶ期とより古く位置付けられている〔山本 1999〕。ただ、筆者の実年代観〔高橋 1993〕ではⅦ期は 9 世紀末から 10 世紀初めとなり、しかも東海産緑釉陶器のⅢF の可能性もあるため、近江の緑釉陶器生産が 9 世紀に遡るかは、いまだやや慎重な検討を要する。なお、伊藤航貴氏は近江の緑釉陶器生産が 10 世紀第 1 四半期に遡るとみることに慎重なようである。氏の今後の研究成果を待ちたい〔伊藤 2017〕。
- 14) 英文要旨にはジョセフ・ライアン氏の援助を受けた。感謝の意を表したい。

〔引用・参考文献〕

- 大西 遼 2020「地方における白瓷生産拡散の実態と猿投窯―尾張国知多半島・伊勢国・飛騨国・近江国・山城国の白瓷窯から―」『東海窯業史研究論集』Ⅲ、東海窯業史研究会
- 伊藤航貴 2017「水口丘陵古窯跡群春日支群における緑釉陶器生産について」考古学研究会関西例会発表資料
- 九州歴史資料館 1982『大宰府史跡昭和 56 年度発掘調査概報』
- 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅱ〈1976 年度〉
- 京都市埋蔵文化財研究所 1983『昭和 56 年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- 京都市埋蔵文化財研究所 1986『平安京跡発掘調査概報』昭和 60 年度
- 京都市埋蔵文化財研究所 1987『平安京跡発掘調査概報』昭和 61 年度

- 京都市埋蔵文化財研究所 1988『平安京跡発掘調査概報』昭和62年度
- 京都府教育委員会 1980『埋蔵文化財発掘調査概報』第3分冊
- 古代学協会・古代学研究所 1994『平安京提要』角川書店
- 古代の土器研究会 1994『都城の土器集成』Ⅲ〈古代の土器〉3
- 小牧市教育委員会 1987『桃花台沿線開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 齊藤孝正 1983「輪花手法について」『正家1号窯発掘調査報告書』恵那市教育委員会
- 齊藤孝正 1987「猿投窯東山地区における灰釉陶器の様相—東山72号窯出土遺物を中心として—」『名古屋大学総合研究資料館報告』No.3
- 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 2012『春日北遺跡—甲賀市水口町春日—』
- 白石 純 2020「緑釉陶器・緑釉瓦の胎土分析」『平安期緑釉陶器・緑釉瓦生産の多分野協働型研究』石井清司・市川創編、公益財団法人古代学協会
- 高橋照彦 1993「防長産緑釉陶器の基礎的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集
- 高橋照彦 1994「近江産緑釉陶器をめぐる諸問題」『国立歴史民俗博物館研究報告』第57集
- 高橋照彦 1995「緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 高橋照彦ほか 2020『撰関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に—』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室
- 多治見市教育委員会 1981「北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書」
- 豊田市教育委員会 2008『来姓古窯跡群』
- 豊橋市教育委員会 2000・2002『二川古窯址群』(Ⅰ)(Ⅱ)
- 中川 永 2016「灰釉陶器生産の技術拡散に関する一考察—近江窯における導入と展開を巡って—」『三河考古』第26号、三河考古学談話会
- 名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室 2017『東山72号窯発掘調査報告書』
- 奈良国立文化財研究所 1987『葉師寺発掘調査報告』
- 畑中英二 2000「服部末石亭コレクションについて」『中近世古道調査報告3』〈東海道〉(1)、滋賀県教育委員会
- 畑中英二 2003「近江における緑釉陶器生産の様相」『古代の土器研究 平安時代の緑釉陶器—生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会
- 畑中英二・林修平 2008「緑釉陶器生産からみた北脇遺跡」『北脇遺跡発掘調査報告書』甲賀市教育委員会
- 林 修平 2008「近江産緑釉陶器の新資料—滋賀県甲賀市春日杭原遺跡・北脇遺跡出土の遺物をめぐって—」『中世土器研究』123号、中世土器研究会
- 林 修平 2013「概説」『春日伴城窯跡』『春日杭原窯跡』『春日山の神窯跡』『春日峰道窯跡』『甲賀市史』第5巻、甲賀市史編さん委員会
- 日永伊久男 1994「近江の緑釉陶器生産」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3

施釉陶器—』古代の土器研究会

日永伊久男 2007「水口丘陵の緑釉陶器生産」『甲賀市史』第一巻〈古代の甲賀〉、甲賀市史編さん委員会

日野町教育委員会 1985『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集

平井美典 2013「春日北窯跡」『甲賀市史』第五巻〈信楽焼・考古・美術工芸〉、甲賀市史編さん委員会

平尾政幸 1990「平安時代前期の土器」『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所

増子康真 1984「鳴海緑釉陶の系譜と編年」『名古屋市熊ノ前古窯址群』名古屋考古学会・増子康真編

松澤 修 1980「水口町峰道一号古窯跡出土の遺物について」『滋賀文化財だより』No. 39、滋賀県文化財保護協会

松澤 修 1988『近江出土の施釉陶器 実測図集成』Ⅱ、滋賀県近江風土記の丘資料館

森 隆 1991「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」『考古学雑誌』第76巻第4号

山本信夫 1999「大宰府出土施釉陶器の編年について 九州の緑釉・灰釉陶器の基礎資料集成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集

[挿図出典一覧]

図面のうち筆者が再トレースを行っているものは、一部改変を行った

図1 1:〔滋賀県教委ほか2012〕、2:〔豊橋市教委2000〕、3:〔京都市埋文研1987〕、4:〔多治見市教委1981〕、5:〔日野町教委1985〕、6:筆者実測、〔小牧市教委1987〕、7:〔京都市高速鉄道1981〕、8:〔齊藤1987〕。

図2・3 筆者作成。

図4～6 〔滋賀県教委ほか2012〕。

図7 1～20:〔林2008〕、21:〔林2013〕。

図8 1～15:〔松澤1988〕。

図9 1:〔京都市埋文研1986〕、2:〔京都市埋文研1983〕、3:〔京都市埋文研1987〕、4:〔京都市埋文研1988〕、5:〔京都市高速鉄道1981〕、6・7:〔奈文研1987〕、8・9:〔京都府教委1980〕、10・11:〔古代の土器研1994〕。

図10 1:〔京都市埋文研1986〕、3:〔京都市埋文研1987〕、8:〔日野町教委1985〕、9・11・14・15:〔林2008、林2013〕、12:〔京都市高速鉄道1981〕、17・20:〔松澤1988〕、23・26:〔京都府教委1980〕、24・25:〔古代の土器研1994〕。その他:〔滋賀県教委ほか2012〕。

表1 筆者作成。

(文学研究科教授)

SUMMARY

Reconsideration of Green Glazed Pottery Production in Omi

Teruhiko TAKAHASHI

Green glazed pottery was the finest ceramic product fired in Japan from the 9th to 11th centuries during the Heian period. The kilns that produced green glazed pottery were concentrated in Yamashiro and Tamba (near the capital of the Heian period), Omi to the east of Yamashiro, and the Tokai region further east of Omi.

In 1994, the author considered the nature of green glazed pottery production in Omi. However, it has been a quarter of a century since the publication of that paper and the amount of important research has significantly increased since then. The discovery of new kilns and excavations in Koka city are particularly noteworthy. In this paper, I reviewed these recent achievements and undertook a basic consideration of green glaze pottery in Omi.

First, I classified the petal-like decoration on the rim and body and the cross-section type of the base, in addition to the bowl types prominently seen in Omi green glazed ware. Next, based on these classifications, I reexamined newly discovered kilns and clarified the transition to the production of green glazed ware. In addition, I estimated the dates of products by verifying materials excavated from consumption sites.

As a result, I concluded that the green glazed pottery production of Omi had many similar features to that of the Tokai region and had occasional relationships with Tamba, but it was not until the latter half of the 10th century that the uniqueness of Omi products became pronounced.